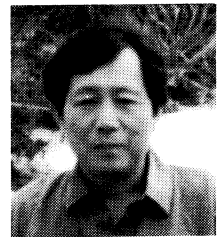


自己流のリハビリで社会復帰



和歌山県東牟婁郡 垣下 千里

「あれ」「今」「何をしようと、したのだろう」

この言葉が脳梗塞の前兆だった。

いつものように、定時に出勤して、定時に家に戻る。

タクシードライバーとして勤務をしている夫。「あれ」と言った日から、一週間後、倒れた。庭に車を止め、部屋に入ると同時に倒れてしまった。

その日は、夜勤の勤務で、午後からの出勤で二十三時までとなっていた。

夫は、二十一時ごろ、急に頭の痛みを感じ、タクシーを降りて、事務所ではばらく横になっただけです。

さらに激しい頭痛となり、早退すると

言っただけで、事務所を後にし、途中、ハンドル操

作がおもうようにはできなくなり、ガード

レールにぶつかりそうになりながら、家に

たどりついたと言っていた。

いったい、夫に何がおこったのだら

う?・・・

私には、まったくわからなかった。

ただ頭痛がする。風邪なのかなと思いつ

た邪ぐすりを飲み、しばらく休ませていた

のですが、一時間後、頭が痛い。夫は、言葉

がしゃべれなく、話せなくなり、立ち上がっ

て歩くことも、すでに出来なかった。

救急病院に電話を入れ、救急車で病院へ

と急いだ。時計の針は、午前三時を回ってい

た。すぐに脳検査が始まり、診断の結果、脳

梗塞。病室は、集中治療室に移され、点滴が

おこなわれていた。

主治医の先生が、一言、「五時間以上たっ

ているから」とポツンと言われた。

私には、五時間以上の意味がわからな

かった。福祉関係に勤めている友達に電話

を入れ事情を説明して、やっと五時間以上

の意味が自分なりに理解できたのです。

少しでも、手でも、足でも、動き始めたら

すぐにリハビリを始めるようにと言って電

話は切れた。

一日め、二日目、三日め、と、過ぎてゆく、

会話は、少しずつ話せるようになってきた

のですが、手も、足も動かずのままだった。一週間過ぎた翌日、足が少しずつ動き始め、夫は看護師さんと、一緒になって喜んだそうです。

私は、すぐに、リハビリを始めることを勧めた。「一分一秒、無駄には、できないから、足をつねに動かしなさい」。そう言って病室を後にしたのです。

翌日、手も、少しずつ動き始めたのです。夫は点滴がはずされ、集中治療室から大部屋のほうに移された。自分から、時間をかけながらトイレにも行くようになってきたのです。

手に、物を握ることは、まだまだむずかしく、食事には、かなりの時間がかかっていた。

日にちがたつにつれて、歩けるようになってきたのです。

屋上に通じる階段を、一步、一步、踏みしめながら、階段の上り下りを繰り返しておこ

なっていた。

また、病室に戻ると、えんぴつを手に包み込むように握りしめ、新聞紙、一面に○、×、△、名前や住所などが、新聞紙一面まっ黒になるまで書いていた。

天候の良い日は、屋上で塀にテニスボールを投げながら、右手で受け止めることを繰り返して行っていた。

夫に、箸と豆、皿をもってきてと言われ、翌日、病室に届けると、箸で豆をひとつぶ、ひとつぶ、お皿に移し、何度も繰り返し。

そういうしているうちに、リハビリの順番が回ってきたのです。リハビリも、その日一日限りのリハビリでした。

主治医の先生は、夫がリハビリにとりくんでいることを知っていて、知らないふりをされていたのです。

手も、足も順調に動き始め、主治医の先生より、一時帰宅のわずかな時間があったえられて家に戻りった時、私は夫に車のカギを

手わたした。

夫は心の中でまよっていたようですが、私は「車の運転をあきらめたら、のれなくなるよ」と一言いった。

車のドアを、そつとあけ、座席に座り、エンジンをかけ、ギアを入れ、アクセルをゆつくり踏み、車は静かに、すーと流れるように動き始めた。

退院するときは、自分の運転で退院させてあげたい、私は心にきめていた。

夫は再び、病室に戻ると、時間の許す限り自己流のリハビリを繰り返し続けたのです。

数日、たつて、あす退院の許可がおりたと一本の電話が入った。

友達に頼んで、病院まで車を届けてもらうことにし、二台の車で病院へと向かい、病室で免許書と車のカギを手わたした。

「自分で運転して戻ってきてね」と言いながら私は友達と戻ることにした。

家で待っていたら、しばらくして車のエンジン音がしてきた。

庭に車を止め、ドアをあけて降りてくる姿は、はつらつとした笑顔で自信にみちていた。

退院後は病院のほうより、社会復帰までの二週間の一時帰休となり、休みを利用して、少しずつ少しずつ車を走らせながら距離をのばし、言葉がすらすら出るように、発声の練習もしていた。

ついに夫は社会復帰となり、その後もドライバードライバーとして勤務し、休みの日には、日曜大工や家庭菜園で季節の作物を作り、つねに身体を動かしている。平成二十年（二〇〇八年）九月をもって定年。夫は定年後は、自給生活と日本列島をゆつくりと旅して回りたいと抱負を語っていたのですが、会社からの要望で引き続き、ドライバードライバーとして勤務を続けることになった。

（編集者注）脳卒中後の運転再開に際しては、運転の妨げになる後遺症がないかを担当医に確かめ、さらに、運転免許センターや警察署で適性検査を受け、公安委員会の許可をもらってください。